

BOOK ANGLE | 書評

著者の巧みな筆の力で IFRSの真の正体を解説する

◎田中弘一著

『IFRSはこうなる』

◆「連単分離」と「任意適用」へ



東洋経済新報社
二四八ページ
税込一六八〇円

石川純治

Ishikawa Junji

駒澤大学経済学部教授

昨年6月、当時の自見大臣の政治的決断、すなわちIFRS(国際会計基準)の強制適用・連結先行の既定路線を軌道修正する発言が大きな反響を呼んだが、目下、IFRSの動向とわが国の対応が産業界や学界そしてエコノミストからも注目されている。

そうしたなか、本書は絶好のタイミングで出版されたが、著者のIFRS関連の著作は本書が初めてではない。①『国際会計基準はどこへ行くのか』(2010年)、②『複眼思考の会計学——国際会計基準は誰のものか』(2011年)に次いで3冊目になる。著者のベストセラー『時価会計不況』(2003年)では時価会計を「魔法の妙薬」ではなく日本経済を破壊する「劇薬」のようなものだとして断じたが、3冊いづれにもそのスピリッツが脈々と流れている。IFRSのさまざまな面での正体を知りたい読者には、今回の著作もまたその期待を裏切らない。

評者は①の書評(『週刊経営財務』2010年11月29日号)で「この本には『読ませる力』がある。なぜそのような『力』があるのか、評者はそれをつねに意識しながら、最後まで一気に読んだ」と書いたが、本書もまた同じく、巧みな比喻や皮肉そして内幕話などを交えた「筆の力」で一気に読ま

された。著者は①でIFRSは「どこへ行くか」と問うたが、本書はまさに「こうなる」と、その帰着点を明かしている。副題に付けられた「連単分離」と「任意適用」である。多分「そうなる」であろうと思っても、書名に「こうなる」と断じる勇気を持つものはそういないだろう。とりわけ大学教授のような面子を大いに気にする人たちにとっては、万一そうならない場合を想定すると、とてもそのようなタイトルはつけられない。

さて、本書は12章から構成されているが、著者の言う通りどの章から読んでも別の章を読みたくなる。まさに「読ませる力」のなせるわざである。例えば、IFRS物語(第2章)での、IFRSの生い立ちと政治力学的な背景の理解は重要なところだ。まさに誰も読んだことのない真実が、内幕話も交えて語られている。また、IFRSは誰のためのものか(第7章)では、IFRSが想定する投資家像(「企業の解体利益」を狙う投資家)をあぶり出しているが、会計の本来の役割は産業界に新たな資金を呼び込んでその存続発展に貢献する「公器」ではなかったか、とする点はまったく同感だ。この点で、「連単分離」は世界の常識(第10章)での、企業の思惑と投資家の思惑をどうジャスト・ミートさせるかの議論は重要な視点だ。資本市場分割論の議論もその点を浮き彫りにしている。また連結財務諸表が報告書でも決算書でもないとする点も、単体財務諸表との本質的相違をみる点で重要だ。

さらに、先に会計は公器という点に触れたが、日本はいかなる会計を目指すべきか(第12章)では、経営者の実感と一致する利益概念に言及され、物づくりや中長期の視点から「企業会計原則」の再登場を促している。何が健全な会計思想かという点でも、大切どころだ。

他にも、なぜ世界中の会計基準を統一するのか(第4章)での「裏の事情」、こんな会計を信用できるか(第6章)での資産除去債務や負債時価評価のパラドックス、そして日本の国益と産業を左右するIFRS(第8章)での(ミクロだけでなく)マクロ経済を左右する会計基準など、本書には、なぜ「連単分離」と「任意適用」になるのか、その理由や背景がたっぷり書かれている。IFRSが単なる会計ルールの世界基準というレベルではないだけに、多くのエコノミストにお勧めしたい。